

せわやがトカラ情報

一隅を照らす十島の教育

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町 13 番 13 号
TEL 099-227-9771

五月…足下を深く掘る

十島村教育長 原口 英典

新学期が始まってひと月。十島の7つの島々の、各小中学校14校は、それぞれに新たな祈りの一灯をもち、己に、そして仲間に、新たな一滴を注ぎつつ歩みだした。すべての人が、新しい学期の始まりに、「ここで」学びを深めたり、「ここで」教職にのめり込んだりと、意を固め、未来の自分づくりに、今を積み上げている。

その結果として、4月だけでも、十島の子どもたちの学習活動の一端が、新聞やラジオにも取り上げられ、十島の生きた教育が展開されている。

ところで、「ここで」の教育活動は、本質的には、複式学級としての授業を、毎日、毎時間、要求される。そのための教える側の準備の苦労や工夫は、いかほどのものであろう。実際の授業はなおさらだ。2学年分の教材準備が、一時間ごとに、しかも毎日求められる。子どもたちも必死だ。中学校にあっては、教科数に対して、教師の数は、絶対的に不足で、一人で複数教科教えざるを得ない。高校入試受験科目にあっては、入学試験もある。入試の性格上、「離島」ということで配慮はなく、入試は公平なのだ。一体、先生方は、どれほどの時間をかけて、目の前の子どもたちに、学力を付けるための準備をするのだろう。本当に頭が下がる。

ある時、理科を教えている小学校の先生と語る機会があった。その先生が「複式学級を経験した人が、十島村の学校に異動することは、おそくないのでは。私もここに来て、初めて複式学級を受け持ちました。とりわけ、理科を複式学級で教えたことのない人にはわからないと思いますが、それは想像できますか。」と。

理科に限らず、それでも、いや、それだからこそ、この先生方は、授業で力を付けるべく、地道に、そして、黙々と取り組んでいる。子どもたちも、先生の熱意に一生懸命応えようと、息抜きする間もなく学びに勤しんでいる。その行きつく先には、汲めども尽きぬ『泉』が湧いている。

“足下を深く掘れ。
泉は、その足下にある。”(ニーチェ)

【十島の子どもたちにカーネーションを】

花屋さんがいない十島村の子どもたちに「お母さんに贈って」とカーネーションを贈り続けて33年。鹿児島市本名町で生花店を営まれている田知行義久さんは、旧吉田町と十島村が同じ鹿児島郡に属していた縁で花を贈り始めたと言います。

5月9日金曜日の夕方、南埠頭で教育委員会職員立ち会いの下、贈呈式が行われました。原口教育長に段ボールいっぱいカーネーションが渡されると、感謝の拍手が鳴り響きました。その後、田知行さんの御厚意に対して、教育委員会から感謝状を贈呈しました。10日には各島に届き、11日の母の日には子どもたちから、田知行さんとお母さんへの二つの感謝の気持ちが込められたカーネーションが、お母さんへ贈られたことでした。



シリーズ——十島の学校にやってきて

灯 諏訪之瀬島分校小学校4年 日高風翔

去年の9月にぼくは、すわのせ島にきました。どんな島か、わからないので、はじめは不安でいっぱいでした。でも、今では楽しく元気にすごしています。そのわけは4つあります。

一つ目は、みんなが話しかけてくれたので、すぐにもだちができたことです。

二つ目は、家族といっしょにすごす時間が多くなったので、会話がふえたことです。

三つ目は、森の中で野生のヤギに会ったり、大きなガジュマルに登ったりして、しぜんのたましいを感じられることです。

四つ目は、学校のじゅぎょうも楽しくて勉強がすきになったことです。

これからぼくが、この島でやってみたいことは、とび魚すくいです。

5さいのころに、お父さんがやるのを見たことがあるからです。この島に来てま



だ8か月ですが、すわのせ島にきて、本当によかったとおもいます。

シリーズ——山海留学生として学ぶ

口之島小学校2年 西湖萌
(平成25年度10か月間在籍)
<4月号に続く>

わたしは、黄色や青色のお魚とお友だちになれてすごくうれしかったです。わたしが、口之島ですきなところは、しぜんがいっぱいあるところ。水や木など、わたしのまわりはいつでもしぜんのものでいっぱいでした。長い長いかいだんをのぼってフリイだけのてっぺんまで行くと、口之島の全部をながめることができました。海でかこまれた小さな島だけど、大きな前だけがあって、学校があって、川があって、みんなのお家がありました。わたしは、川で見つけた手長エビや学校のヤギと仲よくなりました。でも、一番仲よしなのは、学校の友だちです。口之島小中学校のじどう生とが、みんな友だちです。学校が休みの日にも、校庭でサッカーをしてあそびます。サッカーでは、ドリブルでボールのとり合いになることがありました。まけると、やっぱりくやしい気もちになりました。でも、サッカーがおわると、すぐに友だちに帰ることができます。みんなとずっと仲よしでいたい。わたしは、口之島でたくさんのしぜんと友だちにかこまれて、毎日たのしかったです。口之島に来て、本当によかったです。



◇薬物乱用の防止について◇

「ダメ、ゼツタイダメ！」と呼びかける事、なぜダメなのかをきちんと教える事がまず大切です。誘われてあるいは好奇心で始めたという例が多いようですが、断りきれずという理由もあるようです。つまり身近な人間関係の影響を受けるケースが多いということです。最近では、自分の考えや気持ちを相手に伝える能力を養い、ロールプレイなどを通じて薬物乱用の誘いを断るスキルをトレーニングすることも着目されています

「知識伝達型」の健康教育と併せてこのような「ソーシャルスキル」の向上を目指した取り組みも期待されています。6月から7月にかけて「薬物乱用防止広報強化期間」となっています。15歳になれば島を離れる十島村の子供たちに、学校や家庭でより一層の薬物乱用防止のための取り組みがなされるようよろしくお願いします。

【子どもたちの作品】

新しい出会い (2014.4.30 MBCラジオ「私たちの作文」放送)
宝島小学校6年 今村 治樹

照りつけるような日差しの中、一しゅんだけいきを止め、まばゆいばかりにすき通った海に飛び込む。海中には見たこともないような色とりどりの熱帯魚やさんごが僕をむかえてくれる。僕の一番大すきなしゅん間だ。やりかたさえ分からなかったつもりも少しはできるようにな

った。さわるのもこわかったトカゲも、今では僕の遊び相手だ。一年前にはかんがえもしなかった光景の中に、今、ぼくはいる。

この春、ぼくたち家族は、父を残して谷山からこの宝島に引っ越してきた。母のふにん先がこの宝島だったからだ。ぼくにとっては初めての転校。しかも聞くと、全校児童がたった十人ほどの学校らしく、千人以上いた谷山小学校から比べると想像もつかなかった。また、父が仕事の関係でいっしょにさせないことも、僕の不安をいっそう大きなものにしていった。

宝島へ行くには、「フェリーとしま」という船で13時間かけて行く。福岡まで新幹線で1時間30分なのに、とほうない時間がかかる。しばらく鹿児島に帰ってこれないという思いがよぎった。船の中で一晩過ごし、翌日の12時30分ごろ宝島に着いた。船の上から見た宝島は、緑におおわれていた。家も数けんしか見えず、店もありそうではなかった。

(6月号へ続く)



十島村の小・中学校からのメッセージ ⑳

悪石島中学校 教諭 永田正宜

芝刈り機ビーバーでの草刈り、魚釣り、イカひき、魚さばき(少し)。これらは、私が悪石島に赴任してからできるようになったことだ。島での時間はゆっくりと流れ、日々充実した生活を送っている。大運動会、学習発表会、筍採り、収穫祭、持久走大会などの学校行事には、島民の方々が参加・協力してくださり、先生役を担ってくださる。生徒たちも普段よりも張り切り、見てもらう喜びを感じることができる。また、学校が地域のコミュニティの中心となっていることを実感でき、我々教師も学校のために、島のためにできることは何か、考える機会にもなる。

授業は、教師と生徒が1対1の授業が多い。生徒各自に配慮した教育ができ、各自の能力に応じた授業を展開できる。また、子どもたちとのふれあいが多く、そのために生徒対教師の関係が密になる。

悩みは、免許外教科を教えることである。現学校に勤務してからは、臨時免許状を取得して、理科・保体・家庭・音楽を受け持った。学校の実態や自分の教師力向上だと考え、教材研究をして授業を行っているが、本当に生徒の能力を伸ばすことができているかという悩みがある。また、子どもたちは人数が少ないため、集団生活で養われる社会性・競争心が乏しく、主体的に物事に取り組むことができないと感じている。大勢の中でもまれ、生徒の視野を広げていくような取組を、これから実施していけたらと思っている。

教師仲間である「あなた」への私からのメッセージ
最初は、生活への不安はありますが、地域のみなさんの温かいもてなし、同僚のサポートですぐ慣れることができます。地域行事への参加、そしてその後の飲みニケーションはとても楽しいです。

